Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2004, Vol. 51, 145 − 162.

マイクロ－メゾ・ダイナミックスに基づく メディアコミュニケーションの心理的影響に関するモデル

五十嵐　　祐[1)]

本論文の目的は，メディアコミュニケーションに関するこれまでの研究を概観し，社会関係資本概念に基づいて，メディアコミュニケーションと心理的健康との関連を検討するための新たなモデルを提案することである。本論文では，まずメディアコミュニケーションの心理的影響に関する従来の研究について，レビューを行う。次に，マイクロ－メゾ・ダイナミックスの観点から，個人の心理的な要因だけでなく，個人を取り巻く集団の社会的ネットワークの変化をも含めて，メディアコミュニケーションが社会生活に与える影響を検討することの重要性を考察する。最後に，個人のマイクロ・レベルと集団のメゾ・レベルとの架け橋となる社会関係資本概念を導入し，個人内傾性が社会的ネットワークに影響を与え，さらに社会的ネットワークが心理的健康に影響を与えるという新たなモデルを提案する。

1　高度情報化社会の発展に伴う社会生活の変化

本節では，まずインターネットの普及に伴う社会生活の変化に言及し，次に携帯電話からのインターネット利用の現状について述べる。

1.1　インターネットの普及

インターネットの起源は，1969 年にアメリカ国防総省の高等研究計画局（ARPA）によって構築されたARPAネットである。ARPAネットへの接続は軍事関係の研究者に限られていたが，次第にUSE ネットやCSネットといった他のネットワークとの相互接続が行われるようになり，その後，1995年にはインターネット接続が完全に商業化された。現在は，世界のほとんどの国でインターネットの利用が可能となっており，その重要性はますます高まりつつある[2)]。

また，近年の日本におけるインターネットの普及は目ざましく，平成16年版情報通信白書（総務省（編），2004）によると，2003年末のインターネットの利用者数は7,730万人と推計され，人口普及率は60.6％にのぼる。特に，13歳から39歳までの年代においては，インターネットの利用率は90％を超え，40代でも利用率は80％を超えている。今日，インターネットは社会生活を支える情報インフラの一部として，若年層を中心とした幅広い年代に利用されているといえよう。

インターネットは，私たちの生活のさまざまな場面に影響を及ぼしている。インターネットオークションやオンラインショッピングの急速な普及は，マーケティング戦略や物流システムそのものを変革させた（日本経済新聞社（編），2000; Spector, 2000）。また，Webサイトを通じて，個人や組織が自由に情報発信を行えるようになったことで，NGOやNPOといった組織の社会的な影響力が強まっていることも報告されている（通商産業省（編），2001）。

さらに，インターネットの普及によって大きく変化したのは，人々の対人関係，すなわち，社会的ネットワーク（social network）である。例えば，遠くに住む家族や友人とのやり取りは，電子メールのおかげで，低コストかつ手軽になった。また，企業におけるIT（Information Technology）の導入は，企業内ネットワークの変革をもたらし，生産性を大きく向上させた（Sproull & Kiesler, 1991）。このように，インターネットは，もはや仮想現実空間（virtual reality）の域を超え，現実の生活に大きなインパクトを与えているといえる。

1.2　携帯電話からのインターネット利用

著名なコンピュータ・ジャーナリストであるHow-

1）名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）
日本学術振興会特別研究員

2）インターネットの歴史については，村井（1995, 1998），古瀬・廣瀬(1996)，浜野(1997)，脇(2003) が詳しい。

ard Rheingoldは，その著書“Smart Mobs”の中で，日本の携帯電話文化を，次のように描写している。

> 私はその日，東京の街を歩いている人々が，携帯電話に話しかける代わりにそれにじっと見入っている姿を目撃したのである。今や世界中の多くの場所で当たり前になってしまったこの光景が，これまで何度か経験したことのある感覚を，私の中に呼び起こした。それは，技術が私の生活を自分自身にはほとんど想像もつかない仕方で変えようとしていることの，即座の認知だった（Rheingold, 2002, p.4)。

情報技術の発展は，パソコンだけでなく，携帯電話（PHSを含む）による文字コミュニケーションをも可能にした。1993 年には，世界で初めてフィンランドで携帯電話のショートメッセージのサービスが開始され，その後，イギリスや韓国でも同様のサービスが開始された。人々は，携帯電話によって，場所にとらわれずに音声通話を行えるとともに，メッセージを送受信することも可能になったのである[3)]。

一方，わが国において携帯電話からのインターネット接続サービスが開始されたのは，ここ最近のことである。まず，携帯電話（PHS）によるショートメッセージのサービスが開始されたのは1996年であり，その後，1997年には電子メール（インターネットメール）のサービスが，1999年には携帯電話からのインターネット接続サービスがそれぞれ開始された。これを受けて，近年，携帯電話からのインターネット利用者は大きく増加している。2004年3月現在，携帯電話の利用者は8,152万人であり，そのうち携帯電話からのインターネット利用者は，6,973万人（89.5％）にも達している（総務省（編），2004)。これは，他の主要国・地域（韓国74.9％，中国33.9％，アメリカ8.9％）よりも，かなり高い水準である。

中でも，10代・20代の若者における携帯電話の普及率は，非常に高い。2003年3月現在，携帯電話を個人で利用している人の割合（個人利用率）は，10代の男性では8割，20代の男性，10代・20代の女性では9割を超える（NRI野村総合研究所，2003)。特に，ショートメッセージや電子メールなどの，携帯電話による文字コミュニケーションサービス（以下，併せて「携帯メール」と呼ぶ）は，携帯電話所持者のおよそ8割が利用していると報告されている(富士通総合研究所，2001)。また，音声通話よりも携帯メールを中心に利用する人は，携帯電話の利用者のおよそ半数にのぼる（イプシ・マーケティング研究所，2003)。このように，我が国において，携帯電話や携帯メールは，すでに若者にとって必要不可欠なコミュニケーション・ツールとなりつつある。

1.3　インターネットの利用目的

では，パソコンと携帯電話とで，インターネットの利用目的はどのように異なるのだろうか。平成15年版情報通信白書（総務省（編），2003）によると，パソコンからのインターネットの利用用途は，電子メール（65.3％）が最も多く，次いで情報検索（59.1％)，ニュース・天気予報等の情報入手（46.5％）となっている。また，携帯電話からのインターネットの利用用途は，電子メール（83.3％）が特に多く，次いで音楽のダウンロード・視聴（45.8％)，有料コンテンツ購入（37.3％）となっている。このように，インターネットの利用用途については，パソコン，携帯電話とも電子メールの利用率が最も高い。

一方，パソコンからインターネットが利用できなくなったら困るか，という質問に対しては，95.4％の利用者が「困る」と回答している。その理由として最も多かったのは「情報収集が不便」(74.0％）であり，「友人や家族との連絡が不便」は27.9％にとどまっている。これに対して，携帯電話からインターネットが利用できなくなったら困るか，という質問に対しては，43.2 ％の利用者が「困る」と回答している。その理由としては，「友人や家族との連絡が不便」(79.8％）が最も多く，「情報収集が不便」は23.0％である。つまり，パソコンは電子メールを利用するためのツールであるとともに，情報収集のツールとしても認知されているのに対し，携帯電話は主に親しい相手とのコミュニケーション・ツールとして認知されていることがうかがえる。

1.4　インターネットの社会的影響への懐疑

他方，インターネットの利用が社会生活に与える影響に関しては，否定的な見方も多い。池田（2000）は，インターネットが社会行動に及ぼすインパクトについて懐疑的であり，その理由を以下のように考察している。まず，池田は，インターネットの特徴を，(1) マスコミュニケーションと対人コミュニケーションとの間の境界の喪失，(2) 情報量の増大に伴うデータベース化の進展と情報オーバーロード，(3) 物理空間という制約の緩和に伴う対人コミュニケーションの変容，(4) 社会的リアリティの不確実性の増大，の4点にまとめている。インターネットの影響力をこれらの観点から考察すると，双方向メディアであるインターネットの持つ情報発信の可能性については，それが選択的・表層的なものにすぎず，テレビや新聞などのマスメディアの持つ影響力には及ばな

3）携帯電話の歴史については，岡田・松田（2002）が詳しい。

い，と池田は主張している。また，池田は，インターネットの利用によって情報収集のコストは減少するが，反面，情報の量に溺れず，その質をどう判断するかが重要となるとも指摘している[4]。

ただし，これらの批判は，池田がインターネット上のコミュニケーションを，マスコミュニケーションからの連続体として捉えていることに起因すると考えられる。パーソナル・コミュニケーションメディアとしてのインターネットの本質的な特徴は，ネットワーキング，すなわち，人と人とを結びつけることにある。例えば，現代の若者の間では，携帯電話などのメディアによるコミュニケーションがすでに生活の一部として定着していることが報告されている（富士通総合研究所，2001）。こうしたことから，インターネットの影響を抜きにして社会的ネットワークのあり方を考察することは，実態を十分に反映していないといえる。また，Brown & Duguid (2000) は，ITを通じて得られる情報を有効に利用するためには，コンピュータ技術よりも，むしろ組織や制度などの社会システムが重要であることを指摘している。しかし，インターネットの普及に伴って，対人コミュニケーションのあり方，ひいては社会構造そのものが変革する可能性も大いに考えられる（水越，1999）。したがって，現代社会において，インターネットの利用が社会生活に与える影響を考察することは重要な意義があるといえよう。

2　社会心理学におけるメディアコミュニケーション研究の流れ

近年，社会心理学の領域では，パソコンや携帯電話などのコンピュータを介したコミュニケーション（Computer-Mediated Communication; 以下，CMCと略す）に対する関心が高まっている。CMCは，音声通話，電子メール，電子掲示板，ブログ（blog），チャット，テレビ電話などのサービスで構成される非対面のコミュニケーションであり，技術の進歩に伴って次々と新しいサービスが生み出されている。本節では，メディアコミュニケーションの特徴についてまとめ，社会的ネットワークに与える影響を概略する。

2.1　メディアコミュニケーションの特徴

パソコンによるCMC は，対面状況のコミュニケーションと比べると，以下のような特徴をもつ（松尾，1999; 宮田，1993; 三宮，1993）[5]。

1．双方向性：主体的・能動的なコミュニケーションによって，情報発信を可能とする。
2．時間的・空間的制約の解放：コミュニケーションの随時性・速報性を生み出し，場所を問わないコミュニケーションを可能とする。
3．社会的制約の解放：性別や年齢，社会的地位にとらわれない，公平な意見交換を可能にする。
4．個別化：個人単位でのコミュニケーションによって，脱役割性や匿名性，仮面性を生み出す。
5．ネットワーク化：未知の人物とのコミュニケーションを可能とする。
6．情報の種類と量の増大：情報処理の負荷を増大させる。また，コミュニケーションの効率化をもたらす。
7．情報の視覚化：文字や画像によって，情報を視覚的に顕在化する。

また，携帯電話によるCMCでも，Webサイトの閲覧や掲示板の利用など，パソコンによるCMCとほぼ同様のサービスが提供されているものの，現在のところは携帯メールの利用が中心である。携帯メールは，パソコンを通じたCMCの持つ上記の特徴に加えて，

1．可搬性：公共空間での個人的なコミュニケーションを可能にする。
2．情報の身体化：常に情報を携帯することが可能となる。
3．即時性：情報の身体化に伴い，ほぼ同期的なコミュニケーションが中心となる。

といった特徴を持つ（中村，2001a）。

4）同様に，Stoll (1995, 1999) や Healy (1998) も，インターネットの利用者がインターネット上で入手できる情報を過度に信用する傾向があることを批判している。

5）欧米では，Joinson (2003) が，(1) 同期性，(2) 伝達される手がかり，(3) 帯域幅とコストの束縛，(4) 匿名性の水準と種類，(5) 排他性，の5次元を用いて，手紙，電信，電話，無線，ショートメッセージの各メディアと，CMCのチャット，USEネット，電子メール，MUDs (MOO)，テレビ会議をそれぞれ分類している。しかし，USEネットやMUDsは日本では一般的でない。また，Joinsonは電子メールを含めた携帯コミュニケーションの特徴については述べておらず，さらにメディアの可搬性という側面にも触れていない。したがって，ここでは日本の研究者によるCMCの分類を中心に取り上げる。

2.2 CMCの社会的ネットワークの特徴

コンピュータ・ネットワークが人々を結びつけると，それは社会的ネットワークとなる（Wellman, 2001）。CMCを通じて形成される社会的ネットワークは，(1) 対面場面で知り合った既知の相手との間で形成される社会的ネットワークと，(2) CMCで知り合った未知の相手との間で形成される社会的ネットワーク，の2つに分類することができる（川上・川浦・池田・古川，1993）。これまで，インターネットの利用が未知の相手との社会的ネットワークの形成に有効であることは，多くの研究で報告されてきた（e.g., Boneva, Kraut, & Frohlich, 2001; Kavanaugh & Patterson, 2001; Kazmer & Haythornthwaite, 2001）。例えば，インターネット上の掲示板やニュースグループでは，類似した興味や関心を持つ多様な人々が集まる「情報縁」が形成されており，活発な情報交換が行われている（池田，2000; 川上ら，1993）。また，近年は，既存の参加者からの招待によってのみ参加を許可される「ソーシャル・ネットワーキング（social networking）」と呼ばれるサービスも盛んになりつつある。

一方，Parks & Floyd (1996) は，多くの人々がニュースグループで知り合った相手と親密な社会的ネットワークを形成していることを明らかにしている。さらに，Parks & Roberts (1998) は，インターネットを通じて複数のユーザーに共有の仮想空間をテキストベースで提供し，文字によるリアルタイム・コミュニケーションを可能にするMOOにおいても，同様の現象がみられることを指摘している。したがって，CMCで提供されるサービスの形態にかかわらず，人々はCMCを利用することで新たな社会的ネットワークを形成しているといえよう。

また，コミュニケーション・チャネルの制限されたCMCにおける印象形成は，対面場面における印象形成と比較して議論されることが多い。例えば，金（1999）は，インターネットのニュースグループで知り合った未知の相手に対する印象を，Big Five (McCrae & John, 1992) に基づく5次元のパーソナリティ特性とコミュニケーション内容との関連から検討した。その結果，外向性，友好性はメッセージの親しみやすさや暖かさと，誠実性は信頼性やマナーと，神経質性は言葉の使い方と，開放性は論理性や情報の豊かさとそれぞれ強く関連していることが明らかにされた。一方，メッセージをやり取りする頻度が多いほど，またメッセージの遅延が長いほど，印象が好ましくなる（Liu, Ginther, & Zelhart, 2002）ことや，CMCを通じた短時間の相互作用で得られた印象が，対面場面の相互作用で得られた印象よりも強い（Hancock & Dunham, 2001）ことも報告されている。このことは，CMCでは相手に対する親和感情が高まりやすく（e.g., Walther, 1996），さらに相手の理想化が進みやすい（Bargh, McKenna, & Fitzsimons, 2002; McKenna, Green, & Gleason, 2002）ことを示唆する。

CMCの利用が，既知の相手との対面の社会的ネットワークを補完する役割を果たしていることも指摘されている。アメリカで行われたインターネット利用に関する大規模な調査では，インターネットの利用によって，友人や家族との結びつきが強まることが報告されている（PEW Internet and American Life Project, 2000; UCLA Internet Report, 2003）。また，電子メールをよくやり取りする遠距離恋愛のカップルは，対面や電話のみでコミュニケーションする場合と比べて，高い満足感を示すことも明らかとなっている（Stafford & Reske, 1990）。

パソコンを通じたCMCと同様に，携帯電話によるコミュニケーションも，人々の社会的ネットワークの様態に影響を与えている。携帯電話の利用に関する実態調査では，携帯電話の利用によって，コミュニケーションの回数が増え，他者との交流が活発になると感じている人が多いことが報告されている（岡田・松田・羽渕，2000）。また，携帯メールに関する意識調査においても，携帯メールが対人関係の構築に不可欠であり，その利用が対面のコミュニケーションを増加させていることが明らかとなっている（e.g., 苅野・吉野，2001; 中村，2001b; 吉井，2001）。さらに，携帯メールを利用した在宅介護者のサポート・システムの効果なども実験的に検討されている（川浦・西田・山田，2002; 西田・川浦・山田，2002; 山田・西田・川浦，2004）。

また，携帯メールでやり取りされるメッセージの内容は，さまざまである。中村（2001a）は，大学生の携帯メールの実例を収集し，その内容を「用件連絡」「現状報告」「感情表出」「相談」「身の回りの話題」「一般的話題」の6つに分類した。中でも，その時々のちょっとした出来事や感情を伝える「現状報告」は，携帯メールの最も特徴的かつ典型的な内容であり，コンサマトリー（自己充足性）な側面を持つことが多い（古谷・坂田，2002）。また，数は少ないものの，真剣な「相談」が行われることもある。

これらの知見は，パソコンを通じたCMCや携帯電話コミュニケーションの社会的ネットワークが，対面の社会的ネットワークとパラレルな形で存在し，相互に影響を与えている可能性を示唆する。

2.3 ソーシャル・サポート源としての社会的ネットワーク

では，社会的ネットワークに対して，人々は何を求め，またそこから何を得ているのだろうか。この問いに対し，ソーシャル・サポートに関する多くの研究は，社会的ネットワークが人々の心理的健康に大きな影響を与えていることを明らかにしている（e.g., Hirsh, 1979, 1980; Kadushin, 1982; Levin & Stokes, 1986; 嶋，1991, 1992; Stokes, 1983; Tolsdorf, 1976; Wilcox, 1981)。浦（1992）によると，社会的ネットワークとソーシャル・サポートとの関連に関する多くの知見は，次のように整理される。まず，人と人とのつながりを広げていくことは，環境に適応するために重要である。ただし，その広がりの「全ての」範囲にわたって，直接的で親密的な社会的ネットワークを持つことは決して好ましいことではない。なぜなら，直接的で親密な社会的ネットワークは人の役割を制約し，変化を阻む可能性が高いからである。むしろ，環境の変化に適応していくには，範囲が広く密度の低い社会的ネットワークが好ましいといえる。これは，サポート・ネットワークにおける「弱い紐帯の強さ」(Granovetter, 1973）とも言い換えられるであろう。このようなインターネット上のサポート・コミュニティは，育児サポートのネットワークなど，数多く存在する(宮田・浦・長谷川，2001)。

また，対面の社会的ネットワークと同様に，メディアコミュニケーションを通じて形成された社会的ネットワークも，心理的健康に影響を与えることが考えられる。インターネットは能動的な集団の選択を促進し，集団を再構成していくメディアとして有効である。だが，コミュニケーションの機会の拡大は，同時に社会的ネットワークの境界を曖昧にしたともいえる。インターネットの利用によって接触可能な人間の数は確かに増大したといえよう。しかし，果たしてそのことが，個人の心理的健康にポジティブな影響を与えるような社会的ネットワークの形成・維持を促進しているのであろうか。逆に，インターネットの利用が社会的ネットワークを拡大させ，社会的ネットワークの表層化・希薄化を促す結果，個人の心理的健康にネガティブな影響を与えたり，生活への満足感を低下させたりする可能性も考えられるだろう。つまり，インターネットを利用することで社会的ネットワークが多様化しても，それが心理的健康の改善をもたらす保証はない。

Kraut et al. (1998）は，パソコンを通じたインターネット上のCMC の社会的ネットワークと，心理的健康との関連を実証的に検討した最初の研究である。Krautらは，CMCの利用時間が長い人ほど，家族と一緒に過ごす時間や普段から付き合いのある友人の数が減り，孤独感が高まることを明らかにした。この研究では，CMCの利用が孤独感を高めるプロセスを，以下のように解釈している。まず，CMCを利用することで，パソコンに向かう時間は長くなる。その結果，身近な人々との相互作用が減少し，対面の社会的ネットワークは希薄化する。代わりに形成されるCMCの社会的ネットワークは，時間や距離の制約がなく，高い利便性をもつ。しかし，CMCは身体的な近接性（physical proximity）を欠いているため，対面の社会的ネットワークのような強い紐帯を形成できない。よって，CMCの社会的ネットワークに対する心理的な満足感は高まらず，対面の社会的ネットワークが希薄化した分，孤独感が高まるというのである。

CMCの利用が孤独感を高めるというKraut et al. (1998）の知見は，その後，多くの追従研究を生み出すこととなった（e.g., Eastin & LaRose, 2000; Ferle, 2000; Gross, Juvonen, & Gable, 2002; Nie & Erbring, 2000; Roberts, Smith, & Pollock, 2000; Turner, Grube, & Meyers, 2001; Wright, 2000)。また，Krautら自身も，CMCの利用とソーシャル・サポートとの関連を，以下の2つのモデルに基づいて再度検討している（Kraut et al., 2002)。まず，rich get richer モデルは，外向的であり，すでにサポート・ネットワークを持っている人が，CMCを利用することで既存のネットワークを補強し，より多くのサポートを受けられると仮定する。一方，social compensation モデルは，サポート・ネットワークを持っていない人も，CMCを利用することで新たなサポート・ネットワークを創出できると仮定する。Krautらは3年にわたる縦断調査で，rich get richer モデルを支持する結果を得た。つまり，CMCの利用は，外向的な人についてのみ，コミュニケーションや社会的活動への参加，心理的健康にポジティブな影響を与えていたのである。このことは，たとえCMCを利用したとしても，内向的な人やサポート・ネットワークを持っていない人は，社会的ネットワークを新たに形成することが困難であることを示している。

一般に，弱い紐帯は，社会的に類似度の低い相手との関係であり，新たな情報や有益な資源へのアクセス可能性を高める（Lin, 1982)。したがって，新奇事態における適応など，情報が重要な役割を果たす場面においては，弱い紐帯が有益なサポート・ネットワークとして機能する一面もあるだろう（徳谷，2003)。しかし，浦(1992）の指摘するような，サポート・ネットワークにおける「弱い紐帯の強さ」，すなわち，弱い紐帯のサポート源としての機能は，その前提として親友や家族などの

強い紐帯の存在が不可欠である。つまり，ネットワークを形成する際に，「全ての」範囲にわたって同じレベルの強さの紐帯を持つことは，決して心理的健康に好ましい影響を与えない。したがって，Kraut et al.（1998）の研究で明らかとなった，既存の強い紐帯を弱い紐帯に置き換えてしまうようなCMCの利用スタイルは，心理的健康を低める可能性が高いことが推測される。

これに対して，McKenna et al.（2002）は，対人不安や孤独感が高いほど，インターネット上で「真の自己（real me）」を表出しやすいことを明らかにしている。さらに，インターネット上で真の自己を表出している人ほど，CMCの利用が活発になるとともに，新たにインターネット上で形成された関係の持続率も高く，心理的健康も改善していることが示された。この知見は，Kraut et al.（2002）と異なり，内向的な人やサポート・ネットワークを持っていない人でも，インターネット上に「居場所」を求めることで，サポート源となる新たな社会的ネットワークを獲得し，心理的健康を改善できる可能性を示すものである。

また，Joinson（2003）は，インターネット上では弱い紐帯のほうが比較的広く普及していることを指摘している。インターネット上の多くの集団は興味を共有することで形成されており，対人コミュニケーションは特定の領域に限られる可能性が高い。しかし，集団の中で共有された成員意識と視覚的な匿名性は，社会的アイデンティティを高め，社会的に強く動機づけられた行動を引き起こす（Spears & Lea, 1992）。おそらく，CMCの社会的ネットワークの紐帯は伝統的な意味では弱いのだが，アイデンティティの共有という意味においては，集団を強い紐帯で結びつけているのであろう。

一方，日本や中国，シンガポールでは，転職にあたって「強い紐帯」が重視されることも報告されている（Bian, 1997; 渡辺, 1991）。池田（2000）は，その原因として，日本や中国が他者に対する一般的な信頼感（山岸, 1998）の低い社会であることを指摘している。すなわち，これらの社会では，弱い紐帯という，相手と閉鎖的なコミットメント関係にない人々からもたらされる情報の信用性を割り引いてしまうのである。このことは，弱い紐帯に関する知見が文化や社会構造に依存している可能性を示唆する。

2.4 メディアコミュニケーション研究の新たな視点

以上のように，メディアコミュニケーションの心理的，社会的な影響に関しては，これまで多くの検討が行われてきた。しかし，パソコンを通じたCMCに関するこれらの知見の多くは，諸外国で得られたものである。日本における従来の研究（e.g., 木村・都築, 1998; 篠原・三浦, 1999）は，主にCMCでの対人的相互作用のメカニズムの解明に焦点を当てており，CMCの社会的ネットワークが心理的健康にどのような影響を及ぼすかについては，十分に検討されていない。

また，携帯電話コミュニケーションに関する従来の研究は，メディアの普及初期における“media effects”の検証が大部分を占めており，コミュニケーションメディアの利用者像や利用形態，利用実態の調査，コミュニケーションの内容把握などの記述的なレベルの検討が中心である。こうした研究は，メディア普及初期の実態把握という点では一定の価値がある。しかし，換言すれば，これらは研究者個人の興味に基づく個別の知見の寄せ集めにすぎず，携帯電話コミュニケーションが社会生活に与える影響に関して，理論的な背景に基づく統合的な視点からの検討が行われてきたとは言い難い。

近年は，メディアコミュニケーションの利用が社会生活に与える影響について，社会的な関心が高まりつつある。インターネットの普及が早くから進んでいたアメリカでは，インターネットの利用が社会的ネットワークや心理的健康に与える影響についての検討が，これまで数多く行われてきた。インターネットの普及段階の黎明期を終え，成熟期に向かう途上にある日本においても，今日，メディアコミュニケーション，特に携帯電話コミュニケーションは社会的に大きな関心を呼んでいる。したがって，社会との関わりの中で，メディアコミュニケーションが社会生活に与える影響を統合的な視点から検討することは，ますます重要な課題となっていくであろう。そこで本論文では，メディアコミュニケーションが心理的健康に与える影響について，特に社会的ネットワークとの関連に焦点を当てて議論する。

3 社会的ネットワークのマイクローメゾ・ダイナミックス

社会の中の個人の位置関係は，さまざまな階層から捉えることができる。Pettigrew（1998）は，多様な人間行動の本質的な理解には，社会と個人の両方を包含する複合的な視点が必要であり，それらは大きく3つのレベルに分けられると主張している。第一のレベルは，社会構造や文化の影響を検討するマクロ（巨視）的視点，第二のレベルは，集団内の人間関係を検討するメゾ（中間）的視点，そして第三のレベルは，個人内の心理的な過程を検討するマイクロ（微視）的視点である。

社会的ネットワークは，人と人とのつながりを示すものであり，一個人の主観のみでその様態が決定されるわ

けではない。逆に，個人を取り囲む周囲の人々の認知によって，その人の社会的ネットワークが規定されることも考えられよう。したがって，社会的ネットワークのつながりの様態を，周囲から独立した個人のマイクロ・レベルにおける認知的な変数ではなく，周囲との相互依存に基づく集団のメゾ・レベルにおける環境的な変数として捉えることも可能なはずである。

本論文では，特にメディアコミュニケーションが社会的ネットワークを変化させてきたことに注目し，個人のマイクロ・レベルと集団のメゾ・レベルとをつなぐ包括的な視点から，メディアコミュニケーションが心理的健康に与える影響についての統合的なモデルを構築することを目指す。本節では，安田（2001）の属性的決定論，構造的決定論の枠組みを用いて，個人と集団との関連性を展望する。

3.1　属性的決定論と構造的決定論

安田（2001）は，行動を規定する要因の解明には，属性的決定論と構造的決定論の2つのアプローチがあると指摘している。マイクロ・レベルの属性的決定論は，伝統的な心理学や医学，薬学における個人を分析の単位としたアプローチであり，何らかの生得的および獲得的属性との対応関係により，行為の選択（結果）を説明しようとする立場である。ここでは，個人内の傾性によって，人々の行為，思考，認知，心理的健康に違いが生まれることを前提としている。こうした立場には，前述のソーシャル・サポートに関する一連の研究などがあてはまる。

これに対して，マクロ，メゾ・レベルの構造的決定論では，行為選択のメカニズムが関係性に依存し，行為を取り囲む状況が行為を規定すると仮定する。すなわち，社会的ネットワークの構造によって，人々の行為，思考，認知，心理的健康に違いが生まれるという立場である。このような視点に立った研究には，都市化が個人の心理的健康に与える影響を検討したFisher（1982）や，企業での昇進速度と社員のパーソナル・ネットワークの構造との関連を解明したBurt（1993）などが挙げられる。

構造的決定論に基づく研究の意義は，個人内傾性に違いがなくとも，所属集団における社会的ネットワークの構造の違いによって，個人が得られるサポートや組織のパフォーマンスに明確な差異が生じることを明らかにした点である。安田(2001）は，従来の人文・社会科学の分野が属性的な情報を用いて人々の行動を予測することに偏りがちであることを指摘し，構造的な情報を用いた検討を積極的に行うべきだと主張している。

3.2　ダイアド・レベルでの共有

また，個人のマイクロ・レベルと集団のメゾ・レベルの間には，個人と個人との二者関係というダイアド・レベルが存在する。池田（2000）は，コミュニケーションの送り手Aから見て，コミュニケーションの受け手Bの意見や立場，意味，情報やリアリティが主観的に一致したと，Aが認知していることを「主観的共有」，AとBとの間の客観的な一致や不一致がAによって正しく認識されていることを「客観的共有」と名づけた。すなわち，社会的ネットワークにおける友人の選択は，自分が相手を選ぶと，相手も自分も選ぶであろう，という主観的共有によって成り立つ。しかし，お互いの認知にずれがあると，実際の社会的ネットワークの測定を行った際，AはBを友人として選択したのに，BはAを選択しない，という非対称の選択が起こりうる。これを図式化したのがFigure 1である。また，Holland & Leinhardt（1981）は，集団とはダイアドの集合で成り立っており，ダイアドの総体としての社会的ネットワーク分析の意義を主張している。特に，携帯メールのコミュニケーションは基本的に二者間で行われるため，ダイアド・レベルの主観的共有のずれを検討することは重要な課題である。

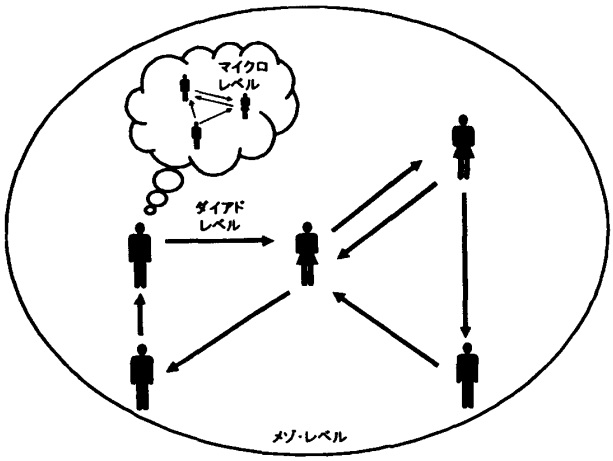

Figure 1　マイクロ－ダイアド－メゾ・レベルの関連

3.3　社会的ネットワーク分析

メゾ・レベルの社会的ネットワーク構造の分析には，社会的ネットワーク分析が用いられる。社会的ネットワーク分析は，他者との関係性に焦点を当て，ネットワークの構造要因が個人の行動や心理的健康に影響を与えるという立場から分析を行う手法である（Scott, 2000; 安田, 1997, 2001)。Wasserman & Faust（1994）は，社会的ネットワーク分析の特徴を，以下の4点に要約している。

1．個人や個人の行動は，独立・自律的ではなく，相互依存的とみなされる。
2．個人間の紐帯（ties）が，資源（物質・非物質を含む）の伝達や流通のための経路となる。
3．個人に焦点を当てたネットワークのモデルは，ネットワークの構造的側面が個人の行動を規定するとみなす。
4．ネットワークのモデルは，個人間の関係パターンが継続した結果として，ネットワークの構造を概念化する。

社会的ネットワークの構造は，不特定の集団を想定した，個人の主観的なネットワークに基づくマイクロ・レベルのデータではなく，ある特定の集団において，個人とそのコミュニケーションの相手の二者間で測定されたダイアド・レベルのデータの集合として決定される(Scott, 2000)。また，ダイアド・レベルのデータを用いることで，集団全体のネットワーク構造を示すメゾ・レベルの指標が算出される[6]。

一方，メゾ・レベルの集団データを用いてダイアド・レベルでの分析を行うのが，統計的社会的ネットワークモデルである。Holland & Leinhardt (1981) のp_1モデルに代表されるこのモデルでは，集団内の二者関係が独立であるという仮定に基づいて，ある属性で分類された社会的ネットワークの構成員間で，ダイアド間の選択傾向，被選択傾向，相互選択傾向を統計的に検定することが可能となる（Fienberg & Wasserman, 1981)。

代表的な社会的ネットワークの測定法としては，ネーム・ジェネレータ法（name-generator method）と地位・ジェネレータ法（position-generator method）の2つがある（Lin, 1999)。ネーム・ジェネレータ法では，職場やコミュニティといった特定の領域内で，回答者に同僚や友人などの特定の人物を想定してもらい，相手との役割関係，その関係が関与する行動内容，または親しさの程度を評定してもらう。一方，地位・ジェネレータ法では，ある職業の名前を提示し，回答者にその職についている人物を想定してもらい，相手との関係を評定してもらう。

ネーム・ジェネレータ法では，親しく関係の緊密な人物が想定され，強い紐帯が反映される傾向がある。これに対して，地位・ジェネレータ法では，資源としての社会的な地位との結びつきを直接測定することを目的としている。したがって，社会的ネットワークと心理的健康との関連を検討する際には，ネーム・ジェネレータ法による社会的ネットワークの測定が有効である。

4　社会関係資本概念の導入

ここまで，人文・社会科学の分野においてメゾ・レベルの視点を導入する意義について述べた。一方で，属性的決定論と構造的決定論とは相互補完的なものであり，力点の置き方が異なると考えるのが妥当であるとの指摘もある（辻, 2001)。したがって，メディアコミュニケーションによって形成された社会的ネットワークが心理的健康に与える影響を検討する際には，現実の対人関係などの環境的な要因だけでなく，個人の内的な要因についても考慮した，マイクローメゾ・ダイナミックスの観点を取り入れることが重要となる。そこで本論文では，マイクローメゾ・ダイナミックスの架け橋となる統合的な概念として，社会関係資本（social capital）に注目する。

4.1　社会関係資本の定義

社会関係資本は，Coleman (1988) によって，社会学の領域で最初に提唱された概念である[7]。Colemanは，社会関係資本を「個人に協調行動を起こさせる社会の構造や制度」と定義し，合理的個人が協調行動を起こすメカニズムを，社会的ネットワークの存在や，信頼や互恵といった規範の存在から説明した。すなわち，社会関係資本は，人々がお互いの関係を維持するために行う投資行動の有無によって増加・減少するという点で，物的資本（physical capital）や，Becker (1963) のいう人的資本（human capital）と同様に，資本（capital）であるといえる。ここでは，社会関係資本は個人に帰属するものであり，議論の焦点は，小規模の社会的ネットワーク内における協調行動から得られる個人の潜在的な利益である。

一方，Putnam (2000) は，Coleman (1988, 1990) の議論を土台として，社会関係資本を「人々の協調行動を促すことにより，その社会の効率を高めるはたらきをする社会的制度」と定義した。Putnamが社会関係資本の例として挙げた要素は，信頼，互恵性の規範，市民参加の社会的ネットワークなどである。つまり，Putnamは，社会関係資本を個人の行動を説明する概念ではなく，市民社会の社会的ネットワークの様態（水平的構造，垂直的構造）を表す変数（市民社会度; civicness）として捉えている。

これまで，社会関係資本に関する議論は，主に社会学，

6）社会的ネットワークの指標については，金光 (2003), Wasserman & Faust (1994) を参照されたい。

7）詳細は，坂田(2001) のレビューを参照。

経済学の分野で展開されてきた。先に取り上げた社会関係資本の定義は，主に社会や組織集団などの様態を記述するため，マクロ・レベル，メゾ・レベルで概念化されたものである。しかし，社会関係資本について議論する際には，社会学や経済学の観点から組織集団の特徴を分析するだけでは十分でない。むしろ，社会心理学の観点から，個人の心理的特性や行動，態度などの影響を考慮したマイクロ・レベルからのアプローチを行うことは，社会関係資本としての役割を果たすような社会的ネットワークの形成プロセスを解明するという点で，大きな意義があるといえよう。特に，パソコンを通じたCMCや携帯メールの利用が社会生活に与える影響を検討する際に，個人を単位としたマイクロ・レベルでの分析と，集団を単位としたメゾ・レベルでの分析の接点として，社会関係資本の概念を取り入れることは，集団における個人の行動をより詳細に解明するためにも有効であると考えられる。

開発援助や社会学などの分野では，ここ数年，社会関係資本に関する多くの知見を統合的に考察するための試みが活発に行われ始めている。例えば，社会関係資本は「文脈限定的」「目的限定的」な概念であり，資本として取り上げる社会的な相互行為の内容，および議論の目的を明示すべきだとの主張がある（佐藤，2001）。さらに，どのような集団の構成が社会関係資本の低下に寄与するのかを明らかにする必要性も指摘されている（池田，2000）。したがって，社会心理学の立場から社会関係資本を議論する場合にも，これらの点を整理した上で，詳細な検討を行う必要があるだろう。

4.2　社会的ネットワークと社会関係資本：Lin（1999）のモデル

本論文では，Putnam（2000）による社会関係資本を構成する3つの要素（信頼感，互恵性の規範，社会的ネットワーク）のうち，特に社会的ネットワークの役割に注目する。社会関係資本の考え方に基づくと，個人の持つ社会的ネットワークなどの「社会関係」は，個人や集団にとって有益である相互作用を生み出す「資本」として定義される。Lin（1999）は，社会関係資本の本質が「報酬を期待した上での社会関係への投資行動」にあると主張し，社会的資源の維持と獲得という観点から，社会関係資本としての社会的ネットワークの役割をモデル化した（金光，2003）。ここで，個人は何らかの利益を享受するために他者との相互作用を行い，社会的ネットワークを形成すると仮定する。

Lin（1999）のモデルでは，集合的資産（collective assets）としての信頼や規範，社会構造に埋め込まれた差異（structural and positional variations）としての経済格差や文化差，男女差は，社会的ネットワーク内での相互作用に影響を与える先行要因となる。また，社会的ネットワークには，資源へのアクセス可能性（accessibility）と，資源への接触（mobilization）という2つの要素が含まれる。資源へのアクセス可能性は，社会的ネットワーク上の位置と個人の持つ資源によって規定される。また，資源への接触は，社会的ネットワーク内の他者との相互作用によって規定される。

さらに，社会的ネットワークにおける相互作用の目的は，表出的行為（expressive actions）と道具的行為（instrumental actions）とに分類される。表出的行為は，情緒的な表出を伴い，行為それ自体が目的となる行為である。また，道具的行為は，限定された目的の達成を目指す行為である。表出的行為は，資源の維持を目的としており，類似した資源を持った相手に対する小さな投資で，大きな報酬を得ることが可能となる。これは，友人関係，恋人関係に典型的である。一方，道具的行為

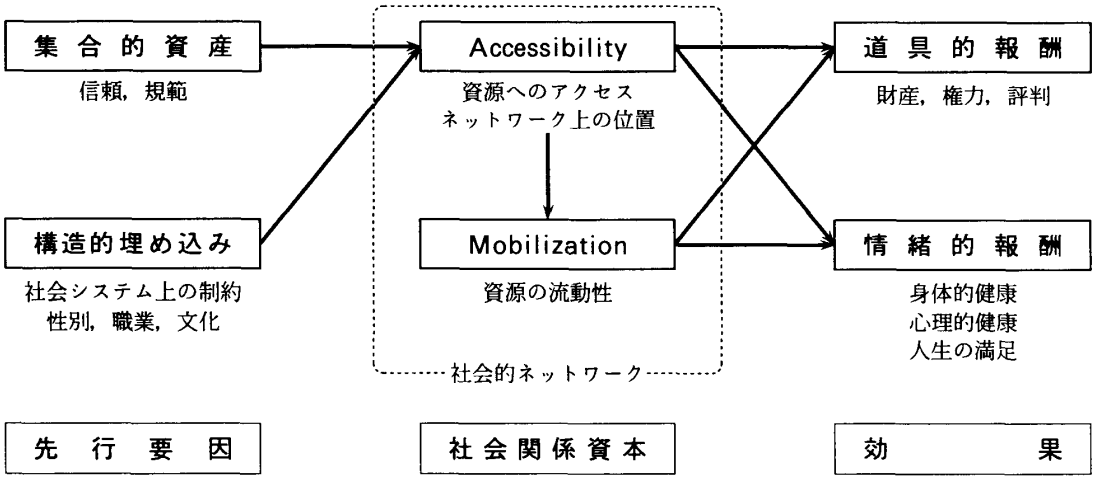

Figure 2　社会的ネットワークと社会関係資本に関するモデル（金光，2003; Lin, 1999）

は，資源の獲得を目的としており，異なる資源を持った相手に対する大きな投資によって，財産や権力，評判などの大きな報酬を得ることが可能になる。

4.3 Lin (1999) のモデルにおける先行要因の再検討

Lin (1999) のモデルは，表出的行為と道具的行為とを弁別することによって，これまで多くの研究で議論されてきた経済的，文化的な側面だけでなく，身体的・心理的な健康，人生の満足といった心理的，情緒的な側面についても，社会関係資本としての社会的ネットワークの役割という観点から検討を可能にする。しかし，このモデルでは，先行要因がマクロ，メゾ，マイクロのどのレベルで生み出され，影響を与えるのかについての言及がない。集合的資産は，社会的ネットワークにおける構成員との協調行動によって生み出されるという意味で，メゾ・レベルの先行要因である。また，構造的に埋め込まれた差異は，社会システムにおける制約から生み出されるという意味で，マクロ・レベルの先行要因である。

これらの先行要因の区分に基づくと，Lin (1999) のモデルではマイクロ・レベルの先行要因が導入されていない。社会的ネットワークにおける対人関係は，人々の間で営まれるコミュニケーションを基礎として成り立つという前提があり（大坊，1998），さらに，コミュニケーションのスキルには個人差がある(相川，2000)。また，孤独感の低減といった，表出的行為に含まれる心理的健康の側面は，抑うつ傾向や対人不安などの個人内傾性とも関連が深い（諸井，1995)。それにもかかわらず，Lin (1999) のモデルでは，社会的ネットワークの様態や心理的健康と関連する要因として，こうした個人内傾性が含まれていない。したがって，メディアコミュニケーションが社会的ネットワークを介して心理的健康に与える影響を検討する際には，個人内傾性の要因を考慮した新たなモデルを構築する必要がある。

Levin & Stokes (1986) は，個人内傾性が孤独感を引き起こすメカニズムについて，(1) 社会的ネットワーク媒介モデル（social network mediation model）と (2) 認知的バイアスモデル（cognitive bias model）という2つのモデルを提出し，それぞれの影響過程を検討している。社会的ネットワーク媒介モデルでは，何らかの個人内傾性が社会的ネットワークの形成や維持を困難にする結果，社会的ネットワークが希薄になり，孤独感が生じると仮定される。一方，認知的バイアスモデルでは，自己や他者に対するネガティブな感情傾向が現実の社会的ネットワークを過小評価するために，社会的ネットワークの様態にかかわらず孤独感が生起すると仮定される。Stokes (1985) やLevin & Stokes (1986) では，外向性，抑うつ，他者受容と孤独感との関連が検討され，いずれの個人内傾性も孤独感に対して2つの影響過程を持つことが明らかにされている。また，Larose, Guay, & Boivin (2002) は，愛着とソーシャル・サポートが孤独感に与える影響を検討するために，ソーシャル・サポートの認知を個人内傾性と同列に扱う認知的ネットワークモデルを提案している。

なお，Levin & Stokes (1986) のモデルでは，社会関係資本としての社会的ネットワークの役割については述べられていない。しかし，孤独感の低減は，Lin (1999) のモデルにおける，情緒的な表出を伴う表出的行為の目的のひとつとして捉えることが可能である。したがって，心理的健康のひとつの指標として孤独感を取り上げると，孤独感を低減するような社会的ネットワークの役割を検討するためには，社会的ネットワークの形成・維持に関連する個人内傾性を組み入れたモデルを新たに構築することが不可欠であろう。

5 メディアコミュニケーションが心理的健康に与える影響

ここまで，マイクローメゾ・ダイナミックスに基づく社会関係資本概念について述べてきた。本節では，メディアコミュニケーションが社会関係資本とどのように関わるのかについて考察し，メディアコミュニケーションのマイクローメゾ・ダイナミックスを検討するための新たなモデルを提案する。

5.1 メディアコミュニケーションと社会関係資本

サポート源の獲得を目的とした他者との相互作用は，社会的ネットワークに埋め込まれた資源を，サポートのために有益な資本として転換するプロセスである。行為者は，社会的ネットワークによる直接的，あるいは間接的な結びつきを通じて，新たな資源を獲得することが可能となる。この場合，社会的ネットワークが社会関係資本足りうるかどうかは，社会的ネットワークを通じて獲得した資源が心理的健康を高めるはたらきを有するかどうかによって決定される。逆に，獲得した資源が心理的健康を低めてしまうならば，その社会的ネットワークは負の社会関係資本とみなされ，社会関係資本の減少をもたらす。

メディアコミュニケーションの普及は，コミュニケーションの距離的制約や社会的制約を解放し，現代社会における社会的ネットワークのあり方を変容させつつある。パソコンを通じたCMCや携帯メールの利用は，新たな

サポート資源を獲得する場を提供し，得られた資源を心理的健康を高めるような社会関係資本へ転換する可能性をもたらす。さらに，メディアコミュニケーションを通じた社会的ネットワークでの資源の獲得が，対面の社会的ネットワークにおけるサポート資源との接触機会を増加させ，間接的な形で社会関係資本を生み出すことも考えられよう。

5.2　メディアコミュニケーションは社会関係資本をどのように変容させるか

Wellman ら（Quan-Haase & Wellman, 2002; Quan-Haase, Wellman, Witte, & Hampton, 2002; Wellman, Quan-Haase, Bpase, & Chen, 2002）は，メディアコミュニケーションが社会関係資本に与える影響を，以下の3つの立場から考察している。ここでは，第2.2 節で紹介した研究について，これらの立場から改めて分類を試みる。

まず，第一の立場は，メディアコミュニケーションが新たな資源の獲得をもたらし，社会関係資本を増加させる，というものである。メディアコミュニケーションの非同期性は，社会的接触の場を，強い紐帯で結ばれた地元のコミュニティから，距離的に離れた弱い紐帯の社会的ネットワークへと転換させる。このことは，距離的な近さに起因する地縁，家族や親戚といった血縁に加えて，共通の趣味や関心を持つ情報縁の形成をもたらす(池田, 1993)。また，弱い紐帯は，社会的に類似度の低い相手との関係を形成し，新たな情報や有益な資源へのアクセス可能性を高める役割を持つ（Lin, 1982)。掲示板やニュースグループでの情報交換を目的とする社会的ネットワークは，この立場に該当する（e.g., Parks & Floyd, 1996)。また，真の自己をインターネット上で表出することも，インターネット上での新たな社会的ネットワークの獲得に寄与する（McKenna et al., 2002)。

第二の立場は，メディアコミュニケーションが社会関係資本を減少させる，というものである。メディアコミュニケーションを通じた弱い紐帯の社会的ネットワークが，対面場面での対人接触を減少させ，孤独感を高めるという Kraut et al.（1998）の研究は，この立場に該当する。ただし，これらの知見に関しては，追従調査によって，内向的な人のみにあてはまることが明らかとなっている（Kraut et al., 2002)。

最後は，メディアコミュニケーションが既存の資源へのアクセス可能性を高め，社会関係資本を補完する，という立場である。メディアコミュニケーションは，既知の相手との対面の社会的ネットワークを補完し，社会化を促進する。Quan-Haase et al.（2002）は，近くに住む友人や遠くに住む友人との電子メールのやり取りが，対面で会う回数や電話の回数の増加に結びつくことを明らかにしている。また，携帯メールのやり取りは既知の相手と行われることが多く，対面のコミュニケーションを増加させている（e.g., 中村, 2001b)。

パソコンを通じたCMCを対象とした従来の研究では，メディアコミュニケーションと社会関係資本との関連は，新たな資源の獲得，またはそれに基づく既存の資源の価値の低下，という第一，第二の立場から語られることが多かった（Lin, 1999)。一方，既知の相手との相互作用が中心となる携帯メールのコミュニケーションでは，対面のコミュニケーションの補完という第三の立場が重要な意味を持つ。しかし，携帯メールのコミュニケーションの補完的役割を，コミュニケーション相手の認知を含めたダイアド・レベルや，集団全体のメゾ・レベルにおいて検討した研究は見当たらない。

5.3　本論文で提案するモデル

以上の議論から，本論文では，Lin（1999）と Levin & Stokes（1986）のモデルを参考に，メディアコミュニケーションが心理的健康に与える影響について，マイクロ－メゾ・ダイナミックスに基づく新たなモデルを提案する（Figure 3)。このモデルでは，(1) 先行要因：個人内傾性，社会構造に埋め込まれた差異が，対面のコミュニケーションとメディアコミュニケーションに影響を与える，(2) 社会的ネットワーク：対面のコミュニケーションとメディアコミュニケーションが，ダイアド・レベル，メゾ・レベルで相互に関連し合い，社会的ネットワーク内での相互作用が営まれる，(3) 心理的健康：コミュニケーションを通じて形成・維持された社会的ネットワークが，心理的健康に影響を与える，という3段階の流れを仮定する。また，個人内傾性が直接心理的健康に影響を与える過程も存在する。

五十嵐ら（五十嵐, 2002; Igarashi, Takai, & Yoshida, in press; 五十嵐・吉田, 2003, 2004）は，このモデルに基づいて，メディアコミュニケーションが心理的健康に与える影響について包括的な検討を行っている。五十嵐（2002）では，先行要因として，対人コミュニケーションを円滑にするための能力である社会的スキルを取り上げ，パソコンを通じたCMCの社会的ネットワークの様態に与える影響を検討した。また，心理的健康の指標として孤独感に着目し，CMCの社会的ネットワークの様態と孤独感との関連についても検討した。その結果，大学生を対象とした調査1，インターネット上で募集した調査協力者を対象とした調査2のいずれにおいても，CMCの社会的ネットワークの形成には社会的

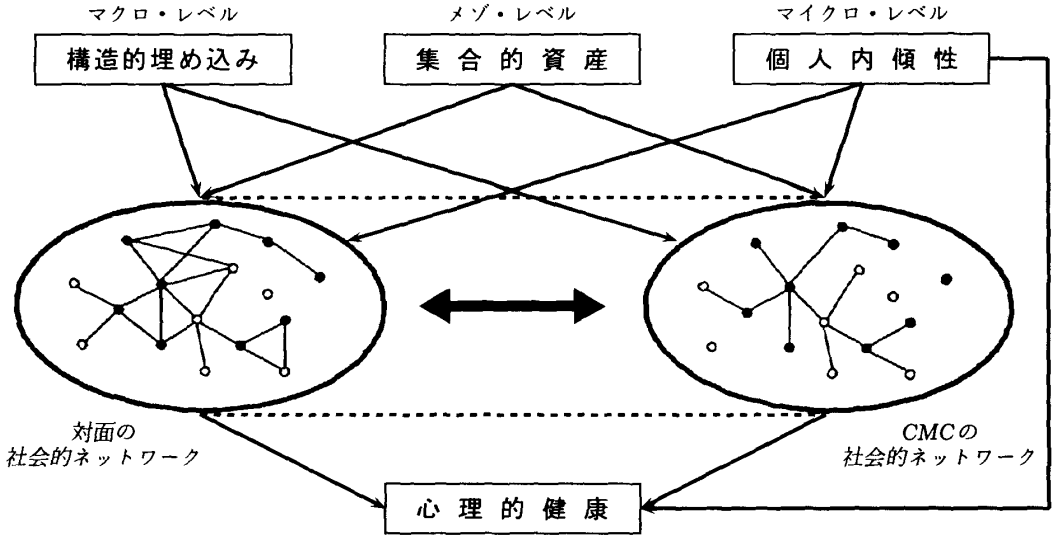

Figure 3　メディアコミュニケーションの心理的健康に関するモデル

スキルが影響し，さらに形成された社会的ネットワークは孤独感を低減しないことが一貫して示された。

また，五十嵐・吉田（2003）は，大学新入生を対象として，携帯メールの社会的ネットワークが孤独感に与える影響を縦断的に検討した。ここでは，社会的ネットワークの様態に関連する先行要因としては，携帯メールの効用認知が取り上げられた。また，どういった種類の社会的ネットワークが孤独感の低減に寄与するのかを明らかにするため，入学前の友人，入学後に知り合った友人の別に社会的ネットワークを測定し，孤独感との関連を検討した。その結果，入学後の友人へのメール送信数の増加は，孤独感の低減に結びついていた。これに対して，4月から7月にかけて，入学前の友人のメールを通じた重要度が増加しているほど，入学後の孤独感が高まることも明らかにされた。さらに，4月の時点で携帯メールの利便性を高く認知しているほど，4月から7月にかけて，入学後の友人への携帯メールの送信数が増加していた。一方で，4月の時点で携帯メールの親和充足機能を高く認知しているほど，4月から7月にかけて，入学前からの友人との携帯メールによる関係の重要度が低下していた。すなわち，携帯メールの社会的ネットワークは，他の手段によって身体的な近接性を満たすことのできる場合にのみ，孤独感の低減に寄与していることが示された。

一方，五十嵐・吉田（2004）は，携帯メールの社会的ネットワークの補完的役割について，ダイアド・レベルから縦断的に検討を行った。その結果，携帯メールの社会的ネットワークは対面の社会的ネットワークの継続可能性を高める補完する役割を果たしており，その影響は少なくとも出会ってから1年間は継続することが明らかとなった。すなわち，携帯メールの社会的ネットワークは，適応を高めるのに有効な対面の社会的ネットワークでのコミュニケーションを活発にするという，社会関係資本の補完的役割を果たしていることが明らかとなった。つまり，携帯メールのコミュニケーションの補完的役割は，相手との関係性の継続可能性という観点からも実証的に示されたといえる。

Igarashi et al. (in press) では，大学新入生を対象に，対面および携帯メールの社会的ネットワークの形成過程と，社会的ネットワーク構造の男女差について，ダイアド・レベル，および集団のメゾ・レベルから検討を行った。その結果，大学のクラスにおける社会的ネットワークの構造は対面と携帯メールとで大きく異なり，携帯メールの社会的ネットワークは選択的関係論に基づいた構造を示すことが明らかになった。また，女性の方が男性よりもネットワーク上の位置が安定しており，さらに友人選択を積極的に行っていることも明らかとなった。このことは，対人緊張の緩和や親和欲求の充足といった特徴を持つ携帯メールが，情報の交換を促進し，さらには女性の対人志向を満たすのに適したツールとして機能していることを示唆する。

以上のように，本モデルに基づく一連の研究は，メディアコミュニケーションが心理的健康に影響を与えるプロセスの解明に，一定の成果を収めつつある。今後は，先行要因との関連から，CMC の社会的ネットワークの形成過程に関する実験的な検討を行うことや，マクロ・レベルの文化差なども考慮に入れた調査を実施することで，本モデルの有効性を多様な観点から確認していく必要が

あるだろう。

引用文献

相川充　2000　人づきあいの技術：社会的スキルの心理学　サイエンス社

Bargh, J. A., McKenna, K. Y. A., & Fitzsimons, G. M. 2002 Can you see the real me? Activation and expression of the true self on the Internet. *Journal of Social Issues,* **58**, 33-48.

Becker, G. S. 1963 *Human capital.* University of Chicago Press.

Bian, Y. 1997 Bringing strong ties back in: Indirect ties, network bridges, and job searches in China. *American Sociological Review,* **62**, 266-285.

Boneva, B., Kraut, R., & Frohlich, D. 2001 Using e-mail for personal relationships: The difference gender makes. *American Behavioral Scientist,* **45**, 530-549.

Brown, J. S., & Duguid, P. 2000 *The social life of information.* Boston, MA: Harvard Business School Press.（宮本喜一訳　2002　なぜITは社会を変えないのか　日本経済新聞社）

Burt, R. 1993 *Structural holes.* Harvard University Press.

Coleman, J. 1988 Social capital in the creation of human capital. *American Journal of Sociology,* **94**, 95-120.

Coleman, J. 1990 *Foundations of social theory.* Harvard University Press: Massachusetts.

大坊郁夫　1998　しぐさのコミュニケーション：人は親しみをどう伝えあうか　サイエンス社

Eastin, M. S., & LaRose, R. 2000 Internet self efficacy and the psychology of the digital divide. *Journal of Computer-Mediated Communication,* **6**.（Retrieved August 29, 2003, from http://www.ascusc.org/jcmc/vol6/issue1/eastin.html）

Ferle, C. L. 2000 Teens' use of traditional media and the Internet. *Journal of Advertising Research,* **40**, 55-65.

Fienberg, S., & Wasserman, S. 1981 Categorical data analysis of single sociometric relations. In S. Leinhardt（Ed.）, *Sociological methodology*（Pp. 156-192）. San Francisco: Jossey-Bass.

Fisher, C. S. 1982 *To dwell among friends: Personal networks in town and city.* University of Chicago Press.

富士通総合研究所　2001　第8回富士通総研インターネットユーザー調査（http://www.fri.fujitsu.com/hypertext/fri/cyber/research8/index.html）

古瀬幸広・廣瀬克哉　1996　インターネットが変える世界　岩波書店

古谷嘉一郎・坂田桐子　2002　遠距離同性友人関係におけるコミュニケーションスタイルと関係満足度：携帯電話・携帯メールに注目して　日本社会心理学会第43回大会発表論文集，844-845.

Granovetter, M. S. 1973 The strength of weak ties. *American Journal of Sociology,* **78**, 1360-1380.

Gross, E. F., Juvonen, J., & Gable, S. L. 2002 Internet use and well-being in adolescence. *Journal of Social Issues,* **58**, 75-90.

浜野保樹　1997　極端に短いインターネットの歴史　晶文社

Hancock, J. T., & Dunham, P. J. 2001 Impression formation in computer-mediated communication revisited: An analysis of breadth and intensity of impressions. *Communication Research,* **28**, 325-347.

Healy, J. M. 1998 *Failure to connect: How computers affect our children's minds, for better and worse.* New York: Simon & Schuster.（西村弁作・山田詩津夫訳　2001　コンピュータが子どもの心を変える　大修館書店）

Hirsh, B. J. 1979 Psychological dimensions of social networks: A multimethod analysis. *American Journal of Community Psychology,* **7**, 263-277.

Hirsh, B. J. 1980 Natural support system and copying with major life changes. *American Journal of Community Psychology,* **8**, 159-172.

Holland, P. W., & Leinhardt, S. 1981 An exponential family of probability distributions for directed graphs. *Journal of the American Statistical Association,* **76**, 33-50.

五十嵐祐　2002　CMCの社会的ネットワークを介した社会的スキルと孤独感との関連性　社会心理学研究，**17**，97-108.

Igarashi, T., Takai, J., & Yoshida, T. in press A

longitudinal study of social network development via mobile phone text messages: Focusing on gender differences. *Journal of Social and Personal Relationships.*

五十嵐祐・吉田俊和　2003　大学新入生の携帯メール利用が入学後の孤独感に与える影響　心理学研究, **74**, 379.385.

五十嵐祐・吉田俊和　2004　対面および携帯メールの社会的ネットワークの相互影響過程―統計的社会的ネットワークモデルを用いた検討―　日本社会心理学会第45回大会発表論文集, 254-255.

池田謙一　1993　情報環境のメタモルフォーゼとコンピュータ・コミュニケーション　川上善郎・川浦康至・池田謙一・古川良治（編）電子ネットワーキングの社会心理（Pp. 141-165）. 誠信書房

池田謙一　2000　コミュニケーション東京大学出版会

イプシ・マーケティング研究所　2003　第3回コンシューマ・レポート―携帯電話の利用に関する調査結果―（http://www.ipse-m.com/report_csmr/report_c3/IPSe_report3_pdf）

Joinson, A. N. 2003 *Understanding the psychology of Internet behaviour: Virtual worlds, real lives.* New York: Palgrave Macmillan.（三浦麻子・畦地真太郎・田中敦訳　2004　インターネットにおける行動と心理：バーチャルと現実のはざまで　北大路書房）

Kadushin, C. 1982 Social density and mental health. In P. V. Marsden & N. Lin (Eds.), *Social structure and network analysis* (Pp. 147-158). Sage.

金光淳　2003　社会的ネットワーク分析の基礎：社会的関係資本論にむけて　勁草書房

苅野正美・吉野絹子　2001　携帯電話コミュニケーションにおける親密度の影響　日本社会心理学会第42回大会発表論文集, 384-385.

Kavanaugh, A. L., & Patterson, S. J. 2001 The impact of community computer networks on social capital and community involvement. *American Behavioral Scientist,* **45**, 496-509.

川上善郎・川浦康至・池田謙一・古川良治　1993　電子ネットワーキングの社会心理－コンピュータ・コミュニケーションへのパスポート－　誠信書房

川浦康至・西田公昭・山田紀代美　2002　携帯メールネットワークによる在宅介護者サポートの研究(2)　－発話行動を通した対人関係の形成過程－　日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 840-841.

Kazmer, M. M., & Haythornthwaite, C. 2001 Juggling multiple social worlds: Distance students online and offine. *American Behavioral Scientist,* **45**, 510-529.

金官圭　1999　CMC（computer-mediated communication）における印象形成に関する探索的研究　社会心理学研究, **14**, 123-132.

木村泰之・都築誉史　1998　集団意思決定とコミュニケーション・モード－コンピュータ・コミュニケーション条件と対面コミュニケーション条件の差異に関する実験社会心理学的検討－ 実験社会心理学研究, **38**, 183-192.

Kraut, R., Kiesler, S., Boneva, B., Cummings, J., Helgeson, V., & Crawford, A. 2002 Internet paradox revisited. *Journal of Social Issues,* **58**, 49-74.

Kraut, R., Patterson, M., Lundmark, V., Kiesler, S., Mukophadhyay, T., & Scherlis, W. 1998 Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being? *American Psychologist,* **53**, 1017-1031.

Larose, S., Guay, F., & Boivin, M. 2002 Attachment, social support, and loneliness in young adulthood: A test of two models. *Personality and Social Psychology Bulletin,* **28**, 684-693.

Levin, I., & Stokes, J. P. 1986 An examination of the relation of individual difference variables to loneliness. *Journal of Personality,* **54**, 717-733.

Lin, N. 1982 Social resources and instrumental action. In P. V. Marsden & N. Lin (Eds.), *Social structure and network analysis* (Pp. 131-146). Sage.

Lin, N. 1999 Building a network theory of social capital. *Connections,* **22**, 28-51.

Liu, Y. L., Ginther, D., & Zelhart, P. 2002 An exploratory study of the effects of frequency and duration of messaging on impression development in computer-mediated communication. *Social Science Computer Review,* **20**, 73-80.

松尾太加志　1999　コミュニケーションの心理学－認知心理学・社会心理学・認知工学からのアプローチ－　ナカニシヤ出版

McCrae, R. R., & John, O. P. 1992 An

introduction to the five-factor model and its applications. *Journal of Personality,* **60**, 175-215.

McKenna, K. Y. A., Green, A. S., & Gleason, M. E. 2002 Relationship formation on the Internet: What's the big attraction? *Journal of Social Issues,* **58**, 9-31.

宮田加久子　1993　電子メディア社会－新しいコミュニケーション環境の社会心理－　誠信書房

宮田加久子・浦光博・長谷川孝治　2001　コンピュータ・ネットワーク上の対人関係が持つソーシャル・サポート機能についての実証的研究　平成11年度電気通信普及財団助成研究集，**15**，313-320.

水越伸　1999　デジタル・メディア社会　岩波書店

諸井克英　1995　孤独感に関する社会心理学的研究　風間書房

村井純　1995　インターネット　岩波書店

村井純　1998　インターネットII　岩波書店

中村功　2001a　携帯メールの人間関係　東京大学社会情報研究所（編）日本人の情報行動2000（Pp. 285-303）. 東京大学出版会

中村功　2001b　携帯電話と変容するネットワーク　川上善郎（編）情報行動の社会心理学（Pp. 77-87）. 北大路書房

Nie, N. H., & Erbring, L. 2000 *Internet and society: A preliminary report.* Stanford Institute for the Quantitative Study of Society. (Retrieved December 30, 2003, from http://www.stanford.edu/group/siqss/Press_Release/Preliminary_Report-4-21.pdf)

日本経済新聞社（編）2000　eリテールに挑む！日本経済新聞社

西田公昭・川浦康至・山田紀代美　2002　携帯メールネットワークによる在宅介護者サポートの研究(1)　－発話の質と量が介護者の心理に及ぼす効果－　日本社会心理学会第43回大会発表論文集，182-183.

NRI野村総合研究所　2003　情報通信利用者動向に関する第13回実態調査（http://www.nri.co.jp/news/2003/030501_1/030501_1.pdf）

岡田朋之・松田美佐　2002　ケータイ学入門　有斐閣

岡田朋之・松田美佐・羽渕一代　2000　移動電話利用におけるメディア特性と対人関係　－大学生を対象とした調査事例より－　平成11年度情報通信学会年報，43-60.

Parks, M. R., & Floyd, K. 1996 Making friends in cyberspace. *Journal of Computer-Mediated Communication,* **1**. (Retrieved August 29, 2003, from http://www.ascusc.org/jcmc/vol1/issue4/parks.html)

Parks, M. R., & Roberts, L. D. 1998 'Making MOOsic': The development of personal relationships on line and a comparison to their off-line counterparts. *Journal of Social and Personal Relationships,* **15**, 517-537.

Pettigrew, T. F. 1998 Applying social psychology to international social issues. *Journal of Social Issues,* **54**, 663-675.

PEW Internet and American Life Project 2000 *Tracking online life: How women use the Internet to cultivate relationships with family and friends.* (Retrieved August 29, 2003, from http://www.pewinternet.org/reports/pdfs/Report1.pdf)

Putnam, R. D. 2000 *Bowling alone: The collapse and revival of American community.* New York: Simon & Schuster.

Quan-Haase, A., & Wellman, B. 2002 *How does the Internet affect social capital.* (Retrieved August 29, 2003, from http://www.chass.utoronto.ca/~wellman/publications/internetsocialcapital/net_sc-09.pdf)

Quan-Haase, A., Wellman, B., Witte, J. C., & Hampton, K. N. 2002 Capitalizing on the net: Social contact, civic engagement, and sense of community. In B. Wellman & C. Haythornthwaite (Eds.), *The Internet in everyday life* (Pp. 291-324). Oxford: Blackwell.

Rheingold, H. 2002 *Smart mobs: The next social revolution.* Cambridge: Perseus Publishing.（公文俊平・会津泉訳　2003　スマートモブズ：“群がる”モバイル族の挑戦　NTT出版）

Roberts, L. D., Smith, L. M., & Pollock, C. M. 2000 'u r a lot bolde on the net': Shyness and Internet use. In W. R. Crozier (Ed.), *Shyness: Development, consolidation and change* (Pp. 121-138). Routledge.

坂田正三　2001　社会関係資本と開発－議論の系譜－　佐藤寛（編）援助と社会関係資本－ソーシャルキャピタル論の可能性－（Pp. 11-34）. アジア経済研究所

三宮真智子　1993　メディアの特性とコミュニケーション－会議における意見交換を中心に　現代のエスプ

リ，**306**，38-45.

佐藤寛　2001　社会関係資本概念の有用性と限界　佐藤寛（編）援助と社会関係資本－ソーシャルキャピタル論の可能性－（Pp. 3-10）．アジア経済研究所

Scott, J. 2000 *Social network analysis: A handbook (second edition)*. London: Sage.

嶋信宏　1991　大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究　教育心理学研究，**39**，440-447.

嶋信宏　1992　大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果　社会心理学研究，**7**，45-53.

篠原一光・三浦麻子　1999　WWW掲示板を用いた電子コミュニティ形成過程に関する研究　社会心理学研究，**14**，144-154.

総務省（編）2003　平成15年版情報通信白書　ぎょうせい（http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/h15/）

総務省（編）2004　平成16年版情報通信白書　ぎょうせい（http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/h16/）

Spears, R., & Lea, M. 1992 Social influence and the influence of the 'social' in computer-mediated communication. In M. Lea (Ed.), *Contexts of computer-mediated communication* (Pp. 30-65). Harvester.

Spector, R. 2000 Amazon.com: Get big fast. Harper Business Publishers.（長谷川真美訳　2000　アマゾン・ドット・コム 日経BP社）

Sproull, L., & Kiesler, S. 1991 *Connections: New ways of working in the networked organization.* MIT Press. 加藤丈夫訳　1993　コネクションズ－電子ネットワークで変わる社会－　アスキー）

Stafford, L., & Reske, J. R. 1990 Idealization and communication in long-distance premarital relationships. *Family Relations,* **39**, 274-279.

Stokes, J. P. 1983 Predicting satisfaction with social support from social network structure. *American Journal of Community Psychology,* **11**, 141-152.

Stokes, J. P. 1985 The relation of social network and individual difference variables to loneliness. *Journal of Personality and Social Psychology,* **48**, 981-990.

Stoll, C. 1995 *Silicon snake oil: Second thoughts on the information highway.* New York: Doubleday.（倉骨彰訳　1997 インターネットはからっぽの洞窟　草思社）

Stoll, C. 1999 *High-tech heretic: Why computers don't belong in the classroom and other reflections by a computer contrarian.* New York: Doubleday.（倉骨彰訳　1999　コンピュータが子供たちをダメにする　草思社）

徳谷智美　2003　情報収集が大学新入生の初期適応に及ぼす影響　日本社会心理学会第44回大会発表論文集，480-481.

Tolsdorf, C. C. 1976 Social networks, support, and coping: An exploratory study. *Family Process,* **15**, 407-417.

辻竜平　2001　社会的ネットワーク分析：その理論と分析の基盤　認知科学，**8**，454-465.

通商産業省（編）2001　平成13年版通商白書（http://www.meti.go.jp/hakusho/tsusyo/soron/H13/）

Turner, J. W., Grube, J. A., & Meyers, J. 2001 Developing an optimal match within online communities: An exploration of CMC support communities and traditional support. *Journal of Communication,* **51**, 231-251.

UCLA Internet Report 2003 *Surveying the digital future: Year three.* UCLA Center for Communication Policy. (Retrieved August 31, 2003, from http://ccp.ucla.edu/pdf/UCLA-Internet-Report-Year-Three.pdf)

浦光博　1992　支えあう人と人：ソーシャル・サポートの社会心理学　サイエンス社

脇英世　2003　インターネットを創った人たち　青土社

Walther, J. B. 1996 Computer-mediated communication: Impersonal, interpersonal, and hyperpersonal interaction. *Communication Research,* **23**, 3-43.

Wasserman, S., & Faust, K. 1994 *Social network analysis: Methods and applications.* Cambridge University Press.

渡辺深　1991　転職結果に及ぼすネットワークの効果　社会学評論，**42**，2-15.

Wellman, B. 2001 Computer networks as social networks. *Science,* **293**, 2031-2034.

Wellman, B., Quan-Haase, A., Bpase, J., & Chen, W. 2002 *Examining the Internet in everyday life.* (Retrieved August 29, 2004, from http://www.chass.utoronto.ca/~wellman/

publications/euricom/Examinig-Euricom.PDF)

Wilcox, B. 1981 Social support in adjusting to marital disruption: A network analysis. In B. Gottlieb (Ed.), *Social networks and social support* (Pp. 97-115). Beverly Hills, CA: Sage.

Wright, K. 2000 Computer-mediated social support, older adults, and coping. *Journal of Communication,* **50**, 100-118.

山田紀代美・西田公昭・川浦康至　2004　携帯電話による電子メールネットワークが在宅介護者の健康に及ぼす効果　日本看護学会誌, **13**, 29-38.

山岸俊男　1998　信頼の構造　日本経済新聞社

安田雪　1997　ネットワーク分析：何が行為を決定するか　新曜社

安田雪　2001　実践ネットワーク分析－関係を解く理論と技法－　新曜社

吉井博昭　2001　若者の携帯電話行動　川浦康至・松田美佐（編）携帯電話と社会生活（現代のエスプリ405）(Pp. 85-95). 至文堂

（2004年9月20日　受稿）

ABSTRACT

A conceptual framework of micro- and meso-level effects of computer-mediated communication on psychological well-being

Tasuku IGARASHI

To advance a theory of the effect of computer-mediated communication (CMC) on psychological well-being, this article describes a model that extends Lin's (1999) model of social capital by integrating CMC social networks as a mediator of the relation between individual dispositions and psychological well-being. The proposed model contains three blocks of variables in causal sequences. One block consists of pre-conditions of social networks; collective assets, each individual's position in the social structure, and individual disposition. Second block is comprised of face-to-face and CMC social networks interwined with each other. Third block depicts psychological well-being affected by both dispositions and social networks. In this model, social networks are assumed to be dyad- and meso-level outcomes of action. To apply such assumption to this model, the importance of micro- (embedded self), dyad- (interpersonal), and meso- (structural) levels of analysis are discussed.

Key words: computer-mediated communication, social networks, social capital, micro/dyad/meso levels of analysis